

# 営農情報

第88号平成22年8月26日発行（イチゴ）

## 九州北部地方（山口県を含む）1か月予報

（8月21日から9月20日までの天候見通し）平成22年8月20日 福岡管区气象台 発表

<特に注意を要する事項>

期間の前半を中心に気温の高い状態が続く見込みです。

<予想される向こう1か月の天候>

期間の前半は平年と同様に晴れの日が多く、後半は数日の周期で変わるでしょう。

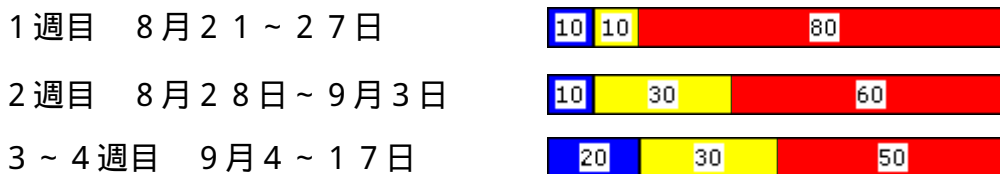
向こう1か月の気温は、高い確率60%です。

週別の気温は、1週目は高い確率80%です。2週目は高い確率60%です。3～4週目は高い確率50%です。

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）>



<九州北部地方 気温経過の各階級の確率（%）>



凡例： ■ 低い（少ない） ■ 平年並 ■ 高い（多い）

9月になっても高温が続くという予報です。高温下での株冷入庫については、花芽分化の安定性が懸念されるため、花芽検鏡を行って確実に花芽分化を確認してから定植をして下さい。

## 苗の生育経過

ランナー切り離し頃（6月中下旬）や梅雨の終盤（7/13,14）の豪雨により、炭そ病に感染するリスクが高かったため、汚斑症状や枯死など炭そ病の症状が発生している苗床が一部あります。

また疫病の罹病株も散発しており、定植時の薬剤防除を徹底して下さい。



炭そ病の汚斑（薄い墨汚れ）



疫病の斑点（角型で灰黒色）

梅雨明け後は急激に天候が回復し、苗は徐々に順調な生育になりつつあります。しかし、最高気温が35 位の日が続き、夜温も下がらないため、高温・過乾燥による葉焼け、根傷み、薬害などが生じていますので注意して下さい。

害虫ではアブラムシ、ヨトウムシ類、ハダニ類の発生が多く見られます。特に8月下旬に新葉にアブラムシが多発していますので注意してください。

苗の最後の手入れあとと定植後、活着してからの防除を徹底して下さい。

「炭そ病」「ウドンコ病」が発生した場合や、生育が遅れクラウンが充実しない場合は、遅い作型にするなど、苗の生育状況に応じた作型の選択が必要です。

## 育苗管理

本年は高温が続いているので、普通ポットの花芽分化促進のため、日中は寒冷紗を被覆する。根張り(根傷み・根量不足)が悪く、輪斑病が激しく発生している場合は、寒冷紗被覆を行い、葉面散布(OKF-1:1,000倍、メリット青:500倍など)を1~2回程度行う。

育苗床で「炭そ病」発病を認めた株は廃棄するとともに、発病株のあったポットフレームごと除去し、その中の苗は原則として本田に定植しない。

また、その周辺株は早期作型に使用しない。

### 定植準備

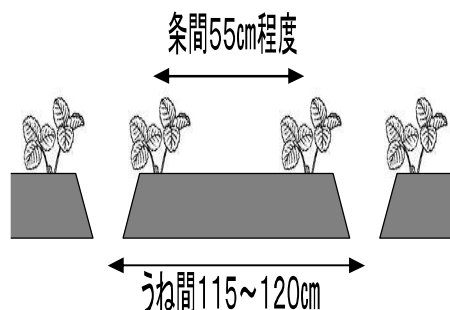
うねを作った後は定植までビニル被覆(べたかけ)をしておく。

早期作型は高温時の定植になるので、定植前に早めに寒冷紗を張って、地温を下げると活着促進・根傷み防止になる。被覆は3日間程度とし、軟弱徒長を防ぐ。

定植前に必ず花芽検鏡を行い、花芽分化ステージが6割以上で定植する。

株冷・夜冷出庫時に花芽分化が悪い場合は、数日後に再度検鏡し、定植する。入庫中に苗傷みが進んでいて生育不良が予想される場合は、出庫後速やかに定植する。

➤ 普通ポットの定植時期は、例年は9月20日頃が目安となるが、本年はこれまで高温で推移しているため、検鏡で花芽分化を確認してから定植する。



「あまおう」の果梗は、しなりがなく折れやすい。果房は、クラウンの傾いた方向(湾曲した外側、一般にランナーの反対側)に伸びるので、果実を成らせる方向にやや傾けて定植する。

疫病予防には「リドミル粒剤2」の土壌混和を行う。(10kg/10a)

## 定植期別、2番果房分化までの管理

作型によって2番果房の連続性が異なる。作型を組合せ全体としての安定出荷を目指す。

### 9月18日以前定植の場合

基肥の削減や寒冷紗被覆、活着後のかん水制限を行い、生育抑制に努める。

### 9月19～28日定植の場合

かん水による活着・生育促進を図る。活着肥・液肥はしない。

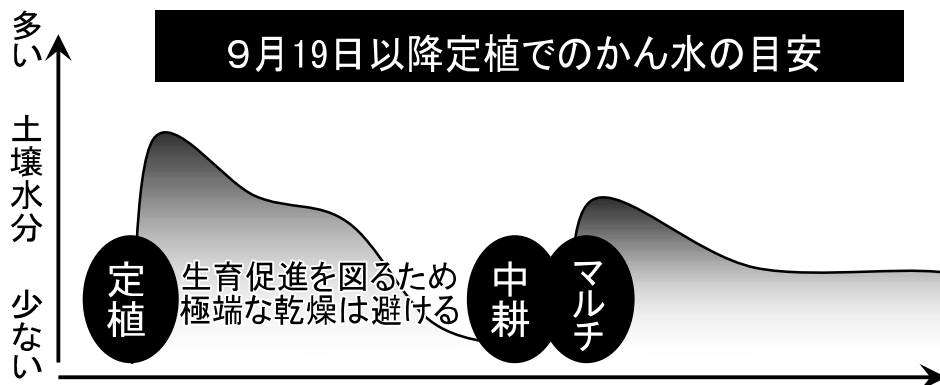
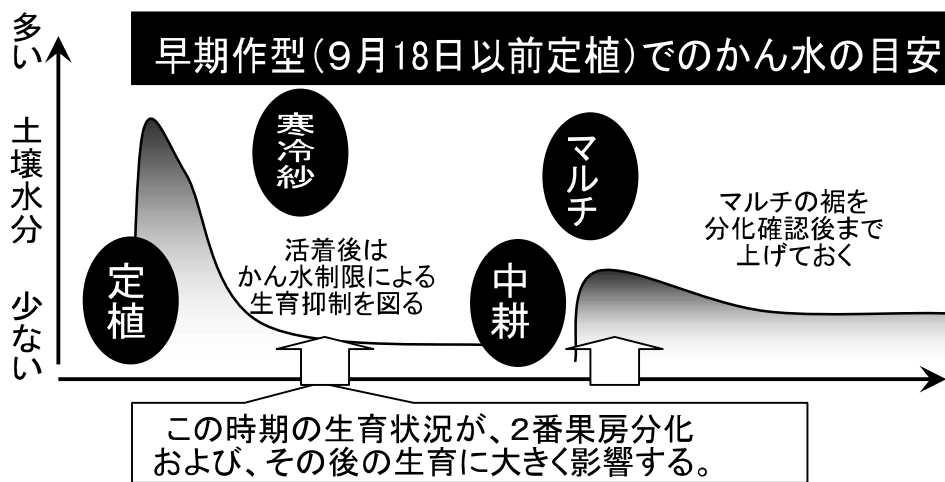
### 9月29日以降定植の場合

かん水等での活着・生育促進を図る。また、液肥かん注等により生育促進に努める。

**かん水** 10月10日頃で、最大葉（縦）が8cm程度の生育を目安に行う

定植後のかん水は、活着促進に頭上からのかん水が効果的である。

早期作型では、活着後に、2番果房の分化安定を目的として、徐々にかん水量を控えていく。しかし、生育不良の場合は控えないようにする。



## 2番果房分化促進の寒冷紗被覆

早期作型では、昼間の高温を下げ、2番果房の分化を促進するため、9月25日から10月20日まで寒冷紗を被覆する。

25日間の長期間の被覆は、遮光率や天候により、軟弱徒長となる場合がある。

厚手（遮光率60%程度）の寒冷紗は、10日間程度を目安とし、曇天が続き、株弱りが見える場合は寒冷紗を取り去る。

寒冷紗例	遮光率
シルバー寒冷紗 109 番	39%程度
黒寒冷紗 600 番	51%程度
黒寒冷紗 610 番	58%程度

## 虫対策

### 炭そ病

8月上旬から育苗床で汚班症状やしおれ症状などが発生し始めていた。育苗床で発病した株のあったフレームの苗は見かけが健全でも使用しない。

定植後の発病は早期作型で多い。定植後は、下葉除去後の防除を徹底する。

### 疫病

クラウン部分が褐変ししおれる。葉にはV字状の灰黒色（暗褐色）の病斑が発生する。高温多雨で伝染し、25～30の高温期に発症しやすい。ナス、トマト等も犯す病害である。多発が予想される場合は必ず薬剤防除を行い、本ほで多発したら土壤消毒をする必要がある。

### アブラムシ

育苗期の後半に苗床で多発している。主に新葉に寄生しているので早期発見し、特に早期作型で花芽分化処理前に薬剤防除する。

### ハスモンヨトウ・オオタバコガ

早期作型で被害が激しい傾向。

ハスモンヨトウは、葉裏等に卵塊を産み付けるので、卵塊の除去を行う。

オオタバコガは、新芽や蕾に、卵をひとつずつ産み付け、ふ化した幼虫が新芽や蕾、果実の中に潜る。発生初期（1cm程度まで）の若齢幼虫時の防除が重要である。

### ハダニ

育苗期から発生していたため、本田持ち込みが懸念される。

下葉除去後、マルチ被覆前後に、薬液が葉の裏までかかるように防除する。

「チリカブリダニ」を使用する場合は、早めに使用計画を立て、「チリカブリダニ」に影響が長い農薬の使用を避ける。

### うどんこ病

本田でのうどんこ病の多発原因は、苗からの持ち込みと定植後の防除不徹底である。また、定植前の低温処理と定植後の軟弱徒長は発生を助長する傾向にある。

定植後からビニル被覆頃まで、定期的な防除を行う。

- 1 散布前は必ず農薬ラベルの確認と飛散防止の徹底！
- 2 散布後は必ず散布器具(タンク等)の洗浄と防除履歴の記帳！